

2019.09.08 第2主日礼拝

エズラ 10:1-5 「こころの改革の実」

聖書

- 1 エズラが神の宮の前でひれ伏して、涙ながらに祈り告白しているとき、男や女や子どもの大会衆がイスラエルのうちから彼のところに集まって来た。民は涙を流して激しく泣いた。
- 2 そのとき、エラムの子孫の一人エヒエルの子シェカンヤが、エズラに言った。「私たちは、自分たちの神の信頼を裏切り、この地の民である異国人の女を妻にしました。しかし、このことについてイスラエルには今なお望みがあります。
- 3 今、私たちは自分たちの神と契約を結び、主の勧告と、私たちの神の命令を恐れかきこむ人々の勧告にしたがって、これらの妻たちと、その子どもたちをみな追い出しましょう。律法にしたがってこれを行いましょう。
- 4 立ち上がってください。このことはあなたの肩にかかっています。私たちはあなたに協力します。勇気を出して、実行してください。」
- 5 エズラは立ち上がり、祭司、レビ人、全イスラエルの長たちに、この提案を実行するよう誓わせた。すると彼らは誓った。

はじめに

今日はエズラ記 9～10 章を一回で見て、これでエズラ記の学びを締め括ります。本題に入る前に、聖書は人間とはいかなるものかが書かれている書物で、喜怒哀楽に関する表現が多く出てきます。聖書を検索すると、「喜」は 678 回、「怒」は 466 回、「哀（悲）」は 216 回、「楽」は 154 回使われています。肯定的な感情表現である「喜」「楽」は合わせて 832 回、否定的な感情表現である「怒」「哀（悲）」は合わせて 682 回。数に特別な意味があるわけではありませんが、肯定的な感情表現の方が多いです。なぜなら、神さまが私たちに与えてくださる生き方のゴールは「喜」であり「楽」だからです。しかし、そこに至るまでにどうしても「怒」「哀（悲）」を通らなければならな

いことも真理です。人間が罪深い存在である以上、否定的感情を避けて通れないのです。聖書が描く生き方を天気で表すなら、「雨のち晴れ」です。「怒」「哀（悲）」という雨を通して、「喜」「楽」の晴れの世界に導かれるのです。

さて、エズラ記 9～10 章には、晴れの世界に至る前の雨の世界、しかもそれはしとしと降るような優しい雨ではなく、どしゃ降りの雨の世界が書かれています。エズラ記の最後 10 章 44 節はどしゃ降りの雨が降った事実を記して終わっていますので、何とも後味が悪いですが、その先に晴れの世界があることを忘れないでください。

1. 何が問題なのか

9 章にはどしゃ降りの雨となった原因が記されています。「イスラエルの民、祭司、レビ人は、カナン人、ヒッタイト人、ペリジ人、エブス人、アンモン人、モアブ人、エジプト人、アモリ人など異国の忌み嫌うべき習慣と縁を絶つことなく、かえって、彼らも息子たちも、これらの国々の娘を妻にし、聖なる種族がもろもろの地の民と混じり合ってしまった。しかも、指導者たち、代表者たちがこの不信の罪の張本人なのです。」(9:1, 2)。このとき、バビロンからの第一次帰還からすでに 80 年が経っていますので、イスラエルの民と異国の民との雑婚が普通に行われていたのです。雑婚によってイスラエルの民の信仰がズレてしまう危険性があるので、神さまはそれを律法で禁じられました。このことを信者と未信者の結婚に直接結び付けることは性急です。未信者との結婚はダメと言っているのではありません。未信者と結婚しても、信仰の道を心に留めて歩んでいる方は多くいます。ただし、未信者との結婚に伴う諸課題は、特に信仰の遺棄に至るような諸問題が潜んでいることは心に留めて置かなければいけません。

エズラの時代の問題点は、宗教のリーダーたちが率先して雑婚をし、異国の忌み嫌う習慣にどっぷり浸かっていたからです。この状況を見たエズラは「私はこのことを聞いて、衣と上着を引き裂き、髪の毛とひげを引き抜き、茫然として座り込んでしまった。」(9:3)とあります。9:5 ではこの現状にエズラは「打ちのめされた」とも言っています。前訳の第 3 版では茫然を「色

を失って」と訳していますが、エズラの深い失望と落乱、悲しみを見る思いです。私たちはエズラほどの失望と悲しみを経験することは、生涯の中でそう何度もあることではありません。しかし、一度や二度、またはある方にとっては三度、四度と色を失うほどの大きな失望と悲しみを経験することがあるかもしれません。そのような経験は本当に辛く、苦しいです。今、その苦しさの中におられる方のために祈らせていただきます。

2. 現状に涙する者

イスラエルが抱えていた雑婚を背景に、エズラは神さまの前に涙を流して祈りました。すると、その涙が民の心にも届きました。「エズラが神の宮の前でひれ伏して、涙ながらに祈り告白しているとき、男や女や子どもの大会衆がイスラエルのうちから彼のところに集まって来た。民は涙を流して激しく泣いた。」(10:1)のです。

神さまの御心から離れてしまった現実には涙をするという、その涙はとても尊いものです。民は「私たちは、自分たちの神の信頼を裏切り」(10:2)と言い、雑婚という行為の背後にある神さまへの不信、背信の罪に目が開かれて涙したのでした。私たちは怒りや悔しさから涙を流すことはあっても、自分の罪に対する涙を流すことは少ないのではないのでしょうか。エズラや民のような、悔いて流す涙を神さまは放ってはおかれません。あのダビデ王が不倫の罪を犯し、神さまから厳しい裁きを突き付けられたとき、ダビデは心から自分の過ちを悔いて涙しました。神さまはダビデの悔いた心を受け止めてくださり、その時の心境をダビデは詩篇 51 篇に記しています。「神へのいけにえは 砕かれた霊。打たれ 砕かれた心。神よ あなたはそれを蔑まれません。」(詩篇 51:17)。

こうした悔いた涙を流すすべての人に、神さまは希望を見せてくださる方です。民は言いました。「私たちは、自分たちの神の信頼を裏切り、この地の民である異国人の女を妻にしました。しかし、このことについてイスラエルには今なお望みがあります。」(10:2)と。神さまの赦しとあわれみに拠りずる者には常に望みがあります。悔いて流す聖なる涙を神さまは決して蔑ま

れません。それがどんなに悲惨で辛い状況でも、その涙は真の回復のための涙であり、「今なお望みがある」のです。回復のために「遅い」ということばはありません。それが何歳であろうと、いつでも「今なお望みがある」のです。

3. こころの改革はどこから

こうしてエズラと民の心は神さまの前に一つになりました。それが涙の原因となった問題を解決させる力となりました。「私たちはあなたに協力します。勇気を出して、実行してください。」(10:4) と言って、異国の妻との離縁に踏み切ったのです。そのリストが10:20-44に記されています。離縁という行為に目を奪われてしまうと、涙を流した本質を見誤ってしまいます。離縁は彼らが神さまに立ち返った証であり結果であって、目的ではありません。

ここで注目したいことは、神さまへの信仰の回復という「こころの改革」がどこから行われたのかということです。その場所は家庭からでした。どこから手を付けたら良いのかと言えば、一番身近なところからです。それが家庭であり、そこから信仰の立て直しを図ることが大切なのです。クリスチャンとして家庭の中における自分のあり方に涙する人がいたら、その人には望みがあります。家庭の中に神さまが喜ばれない習慣があれば、そこからまず手を付けてみましょう。いきなり大改革をする必要はありません。小さな一つの良いので、神さまに喜ばれるために今までの習慣を一つだけ変えてみましょう。その取り組みを神さまは必ず助けてくださいます。

結び

捕囚からエルサレムに帰って来た民は、帰って来たことで目的が全うされたわけではありませんでした。崩れた神殿と信仰を建て直して初めて目的が果たされたと言えます。神殿を外側の問題だとすれば、信仰は内面の問題です。外と内の両面に神さまの御手が伸ばされて、神さまに喜ばれるものへと変えられていくのです。特に内側の神さまへのあり方を、お互いに問いかけて主に喜ばれる一週間となりますようにお祈りいたします。